人・地域・思いがつながる和光市図書館の可能性

～地域とともにある情報拠点を目指して～

埼玉県和光市　中岡　貴裕

はじめに

埼玉県和光市はいわゆる「人口減少社会」にあって、今なお人口が増加している数少ない自治体の一つである。しかし、人口流動性が高いがために地域内の人と人がつながりづらい状況や、地域の魅力に気づきづらい状況が市民意識調査等から明らかとなっている。

和光市のこうした状況に、「地域コミュニティを支える情報拠点」を目指す和光市図書館はどのように向き合うべきであろうか。本稿は和光市の現状を確認した上で、和光市図書館として目指すべき一つの方向性について提言するものである。

第１章　和光市の概要と市民意識の現状

（１）和光市の概要

和光市は埼玉県南西部の荒川右岸に位置し、現在の行政区分上でいえば北は埼玉県戸田市、西は埼玉県朝霞市、南は東京都練馬区、東は東京都板橋区と隣接している（別添図 a）。市の南北には東京外かく環状道路が走り、市の中央部を東西に東武東上線・東京メトロ有楽町線及び副都心線が走ることから都心部へのアクセスが良く、交通の利便性は和光市にとって大きな魅力の一つとなっている（別添図 b）。

（２）和光市の人口動態推移

冒頭に述べたように、和光市は人口減少に転じた日本国内において人口が増加している数少ない自治体の一つである。図１として、昭和 30 年から平成 26 年までの和光市の人口動態（自然増減＝出生者・死亡者数の差、社会増減＝転入者・転出者数の差）を図示した。これを見ると、少なくとも昭和 30 年以降からは現在までは一貫して自然増（出生超過）の状態が継続している。それに対し、転入・転出に伴う社会増減の幅は大きく、住民の流動性が高い点が特徴である。平成 26 年度の転入・転出者は合計で 15,110 人（転入者 7,677 人、転出者 7,433 人）であり、同年度の人口 79,338 人であることを考えると、1 年で約 2 割（転入者 1 割+転出者 1 割）もの人が市域を境に転出入による出入りを繰り返していることがわかる（註１）。

（３）和光市民意識の現状

では市民は和光市についてどのように感じているのだろうか。和光市市民意識調査（平成 16、19、21、24、27 年）によれば、市民が和光市に感じている魅力（誇り）は「都心への交通の便のよさ」が常にトップを独占している（別添図 e）。それに対し、「地域のコミ

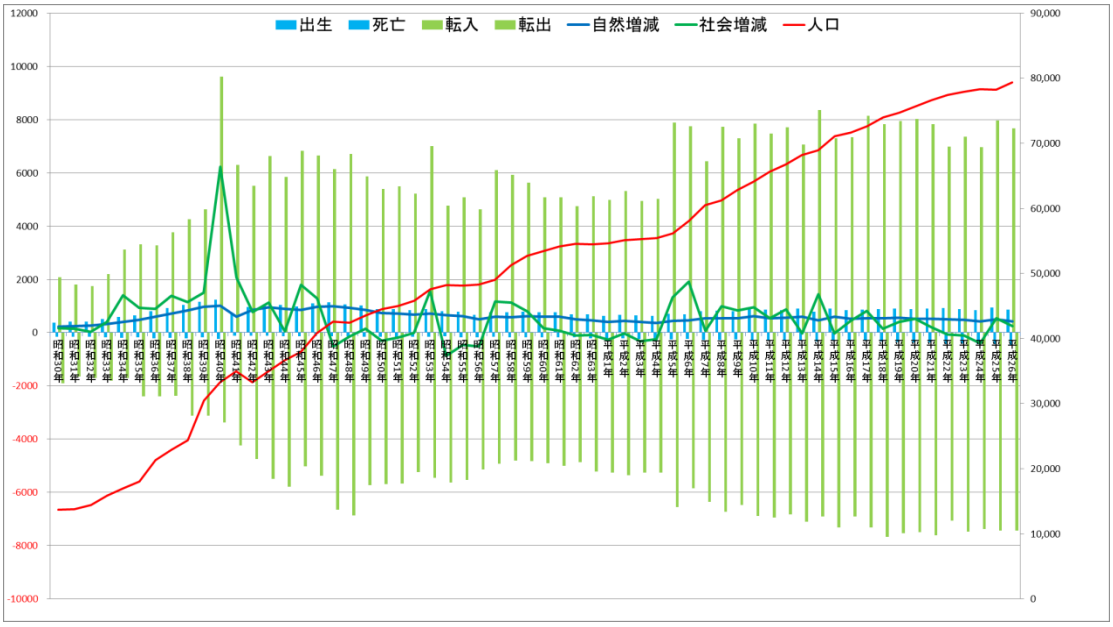


図１　和光市の人口動態推移（昭和 30 年から平成 26 年）

（『和光市の統計』『統計わこう』より筆者作成）

ュニティがよいこと」や「歴史的資源、文化財など和光市の個性を伝える資源」といった項目については全 12 選択項目中常に最下位を争うほどに低い。次に地域コミュニティの中心的な役割を担うといわれる自治会に焦点をあててみよう。昭和 37 年には 88%程度を誇った加入率は近年では減少傾向にあり（註２）、平成 18 年に 50%を割り込み、平成 28 年 4 月現在では 42.40%程度まで落ち込んでいる（別添図 f）。また、先の市民意識調査で和光市民がどの程度地域の住民同士でつながりをもっているかを確認すると、「日頃から何かと助け合っている人」は 10%前後で、「顔があえばあいさつする」程度の人たちが 40%前後となっている（別添表１）。これらの傾向は市域を境に転入・転出者が激しく人の流動性が高いこと、そしてベッドタウンとして「寝に帰る場所」という認識が働いていること由来するものと推察される（註３）。

（４）人と人とのつながりについて

近年では災害時等の非常時に「互助」や「共助」の力が発揮されることを期待し、特に地域内のつながりの重要性が指摘されている。

和光市は人の流動性が高く、人と人とのつながりが弱まっている状況にあるため、こうした力がいざというときに発揮できないおそれがある。しかし一方で、実は地域で人とつながりを求めている人が確実に存在していることがわかっている。例えば平成 26 年 3 月にオープンした和光市内のコミュニティカフェである「アルコイリス」の店長である横田明菜氏は、「アルコイリスを利用する人も単身者である場合は多い。話を聞いてみると、『つながりたいけど、どこにいけばいいかわからなかった。』という人がいた。つながりを求めて色々調べ、アルコイリスにたどり着いたという人もいる。地域に居場所を求めている人は多い。」という（註４）。平成 27 年度市民意識調査の自由記述欄においても、30 代男性から「人と人のつながりのある町にしてもらいたいです」という意見の記述を確認するこ

とができる。このことは、人と人のつながりを求めている人がいながら、つながれていない状況を示唆している。

（５）和光市の地域資源に対する関心について

和光市の住民は毎年全人口の 1 割程度の転入者がいる。その多くが他道府県からの転入者であることが分かっている（別添図 c）。

では、和光市民は居住する地域のことについては無関心なのだろうか。平成 24 年度及び 27 年度和光市市民意識調査によれば、実に 8 割以上の人が市全体や自分の居住地域に関心を持っていることがわかる（別添図 g）。しかし、既に述べたように同調査で「歴史的資源、文化財など和光市の個性を伝える資源」について魅力を感じている人はほとんど最下位に位置している。

和光市には魅力的な人や、魅力的な地域資源があふれている。歴史的なものでいえば埼玉県でも有数の環濠集落として知られる午王山遺跡や、埼玉県内でも最古の部類に入ると言われる旧冨岡家住宅をはじめとした様々な文化財があるし、113 番元素ニホニウムを発見した場である理化学研究所、司法試験合格者が修習する司法研修所をはじめとした機関、そしてがんばっている農家さん、個性的なお店等、よそにはない和光市オリジナルなものが数えきれないほど存在している。しかし、市民の和光市域への関心は、これら和光市オリジナルな魅力といえる「和光市の個性を伝える資源」に必ずしも結びついていないことがわかる。

（６）和光市のこれまでの取組みときっかけづくり

人と人のつながりを求めているのにつながれない状況や、居住する地域に関心はあるのに地域特有の魅力である地域資源に気が付かないままでいる状況は、私には「もったいない」と映ってしまう。しかし、流動性が高いために、市民が自然に人や地域と自然につながることは難しく、つながるためには何か「きっかけ」が必要であると考える。

これまで和光市域ではこの点について様々な取組みが行われている。例えば先に紹介したコミュニティカフェ「アルコイリス」は「おたがいさま食堂」「哲学カフェ」「和光〇〇部」等、模索を重ねながら人と人をつなぐ様々な試みを行っている。また、オンパクを参考に平成 24 年度、25 年度に行われた「和こたん（和光探検博覧会）」は、地域の良いところを知ったり体験することで、地域の魅力を再発見する企画として画期的な事例であった（註５）。二つの事例は、人と人、人と地域をつなぐきっかけづくりとしてとても興味深い。

和光市内の人と人をつなぐ場、そして様々な魅力を知る場として、筆者が注目する場が「図書館」である。一般的に本の貸し借りを行うイメージの強い図書館に果たして何ができるのであろうか。以下、図書館が和光市の人と人をつなぐ場、そして和光市という地域を知り、地域とつながるための場としてできることについて明らかにしていきたい。

第２章　和光市図書館の概要

（１）図書館とは何か

数ある公共施設の中で、図書館は最も認知度が高い施設の一つに位置づけられるだろう。「社会教育施設の利用者アンケート等による効果的社会教育施設形成に関する調査研究」

によれば、図書館の認知度は 65.1％と卓越しており、次の公民館 39.8％、博物館 25.4％を大きく引き離している（註６）。実に多くの住民が図書館を認識していることは数字の上からも明らかである。

そもそも図書館とは何か。我が国で図書館を規定している図書館法によれば、図書館とは「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人が設置するもの（学校に附属する図書館又は図書室を除く。）をいう。」と定義されている。即ち「図書、記録その他必要な資料」を利用に供して、人々の役に立つことが求められている。

図書館には大人向けの一般書、児童書ともに幅広い分野の図書が蔵書されているほか、地方自治体の運営する公立図書館においては立地地域の特徴といえる郷土資料をはじめ、地域の様々な情報が集約されている。まさに知の情報拠点というべき存在といえるだろう。

（２）和光市図書館の概要と利用者

和光市には市立図書館が２つ（本館及び下新倉分館）存在する（図 h）。和光市図書館は「みんなで育てる身近な図書館　～地域コミュニティを支える情報拠点を目指して～」を将来像として定め、情報拠点としての役割を担う機関を目指して運営している。

では、和光市図書館にはどのような利用者がいるのだろうか。和光市図書館の利用登録者は、平成 27 年度で 51,001 人である（和光市教育委員会 2016　註７）。別添図 h 下段は、和光市図書館の全登録者及び 1 年以内の利用者・登録者を年齢別にグラフ化したものである（註８）。30～49 歳の女性の利用・登録が突出しているものの、それ以外はおおむねまんべんなく利用が見られ、幅広い年齢層に利用されていることがわかる。利用にあたって予約を必要とするような他の施設とは異なり、時間ができたときにふらっと立ち寄って利用できる気軽さもその特徴の一つである。

第３章　和光市図書館の可能性と提言

では、和光市が図書館を舞台に展開すべき施策とは何か。和光市図書館が人や地域と人をつなぐきっかけの場となるためには何が必要か。本章では、図書館の機能を活用した施策について提言することとしたい。

（１）人と人がつながる図書館へ

例えば子育て中の親に焦点を当ててみたい。内閣府による平成 25 年度「家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」によれば、「子育てをする人にとって、地域の支えは重要だと思いますか」という設問に対し、実に 9 割もの人が地域の支えが「重要だと思う（「とても重要だと思う」が 57.1%、「やや重要だと思う」が 33.8%）」と回答している（内閣府 2014）。同調査で「地域で子育てを支えるために重要なこと」を問う設問では、「子育てに関する悩みについて気軽に相談できる人や場があること」が 58.1%、「子育てをする親同士で話ができる仲間づくりの場があること」が 54.5%と全体の 2 位、3 位を占めている。

しかし、和光市が実施した「和光市子ども・子育て支援事業計画のためのアンケート調査」（註９）の結果によれば、出産から子育てまでに関する不安や悩みを相談する相手は「友

人や知人」と回答した人が 82.6%にのぼるのに対し、「近所の人」と回答した人は 6.7%にとどまる。また、「妊娠や出産について困ったこと」について問う設問については「妊婦同士の交流の場が身近にないこと」が 26.7%と全設問中最多となっている。なお、同調査で和光市（現住地）に住むことになった理由を聞くと、「結婚や出産を機に」が 46.2%と最多であり、住んでいる期間ついては 3 年未満の人が 52.9%と半数以上を占めている。

これらのデータから見ると、地域の中で子育てに関して気軽に相談できる場が求められている一方、近所の人には相談できないというギャップを確認することができる。

ではこのギャップを埋めるためにはどのような取組みができるだろうか。和光市図書館では、現在「ブックスタート事業」を行っている。この事業はあかちゃんへの語りかけの大切さをお伝えし、わらべうたや絵本の紹介をするものである。平成 27 年度は 403 人もの参加者があった（和光市教育委員会 2016）。平成 27 年度の出生数が 858 人であるため、実に 46.96%の赤ちゃんが参加しているということになる。結婚を期に和光市に住むことになった人で、かつてブックスタート事業に参加した K. N 氏にヒアリングしたところ、「和光市図書館のブックスタート事業をきっかけに、図書館で知り合った人と地域内で会った時にお互いに挨拶をするなどつながりができた」とのことで、図書館がつながりに寄与することを自身の体験をもって示してくれた（註 10）。また、平成 27 年度から開始した「赤ちゃんタイム」という事業は、月に 1 回キッズスペースで乳幼児と保護者が気兼ねなく過ごせる場を提供するものである。出入り自由な場を用意すると、自然に親子が集まり、色々子育ての話をしだすとともに、中には連絡先を交換する人等も出てくる。図書館がきっかけとなる場を提供することにより、つながりが生まれていくのである。

「共通のテーマによって人がつながる場を用意する」ということは、何も子育て世代に限って有効なものではない。「地域の人とつながりを持ちたいが、きっかけが無い」という人にとっては、地域の中で共通の話題を共有できる人とつながるきっかけとなるのではないか。例えば、現在和光市図書館では行っていないが、ある特定のテーマによるオープン参加の読書会等を開催すれば､そのテーマに関心のある人は自然と集まるものと思われる。

図書館が人と人が自然につながる場となるような工夫。それを一つ目の提言としたい。

（２）人と地域がつながる図書館へ

和光市には歴史や文化財だけでなく、地域固有の資源たる「地域資源」が確実に存在している。しかし、地域資源がどんなに宝物のように貴重であっても、それが認識できなければその人にとっては宝物にはなり得ない。魅力を理解することによって、初めてその資源を認識することができる。本稿ではこの地域資源を魅力として理解することを「地域とつながる」と表現したい。では和光市の中で地域資源を知るきっかけとなる場所とはどこか。図書館はその選択肢の中の一つである。そもそも図書館は図書館法第 3 条において示されるように「郷土資料」を収集し、一般公衆の利用に供することに努めなければならないとされている（註 11）。和光市図書館で収集している郷土資料は、郷土の偉人である清水かつら、大石真、新坂和男といった郷土作家らの資料をはじめ、和光市域で発行されているパンフレット等の郷土資料を収集するとともに、図書館として必要な様々な地域の情報が集約されている。無論、地域の魅力がすべて「郷土資料」の概念に収まるわけではな

く、図書館で保有している以外にも人財や自然、景観を含め、市域には多くの地域資源が存在しているのは言うまでもない。しかし、収集の段階で価値が定まっている郷土資料を有し、かつ博物館に比べて利用に関する敷居が低いと考えられる図書館は、地域資源を知るきっかけを得る場としては十分な資質を備えているといってよいだろう。

以下、この資質を元に、具体的に図書館ができる取組みについて企画を提示したい。

【企画①】地域の魅力的な「人」を知るきっかけづくり

図書館で行うことができる地域を知るためのきっかけとして、「読書経験の共有による地域の魅力的な人財を知るきっかけづくり」を提案したい。

地域には様々な魅力的な「人財」が存在している。しかし、何のきっかけも無ければそうした人財がいることを知る術は無いし、ましてやつながりを持つことは難しい。そのきっかけとして提案するのが「読書経験を共有する」企画である。

和光市図書館下新倉分館では、平成 29 年 1 月に和光市民及び和光市内に官舎がある自衛隊体育学校所属のリオオリンピック選手に協力いただき、「トップアスリートと読書～リオオリンピック出場選手の横顔～」と題した企画展を行った。これはトップアスリートに自身の人生観や選手生活に影響を与えた本を紹介いただき、それを市民と共有するための企画として実施したものである。地元でトップアスリートとして活躍する方々の経験を共有することで読書への興味を啓発する一方で、和光市にはこんなに素晴らしい人たちがいるということを認識してもらうきっかけづくりとしての意図を持つものであった。見学者に感想をうかがうと、「オリンピック選手が和光市に関係していると知らなかった」、「トップアスリートになるような方は読書もしているということがわかった」、「同じ本を読んでみたい」等の意見を聞くことができ、その選手が読んだ本を借りていく方もみられた。

この手法は、何も市内のトップアスリートを知るためだけに有効なものではない。例えば和光市には様々な企業が存在している。こうした市内企業の社長らに協力を依頼し、これまでの企業経営の人生観に影響を受けた本を紹介いただく等すれば、これまで近所にあってもあまり利用することが無かった商店等が身近になるきっかけをつくることができる。同様に、例えば地域の自治会長を知るきっかけとすることもできるだろう。地域内の魅力的な商店や自治会を知るために、単にその活動内容を紹介するだけではなく、まずはリーダーを知ることから始めるという意味において、その人生観に影響を与えた本を共有するという手法は汎用性が高いものと思われる。

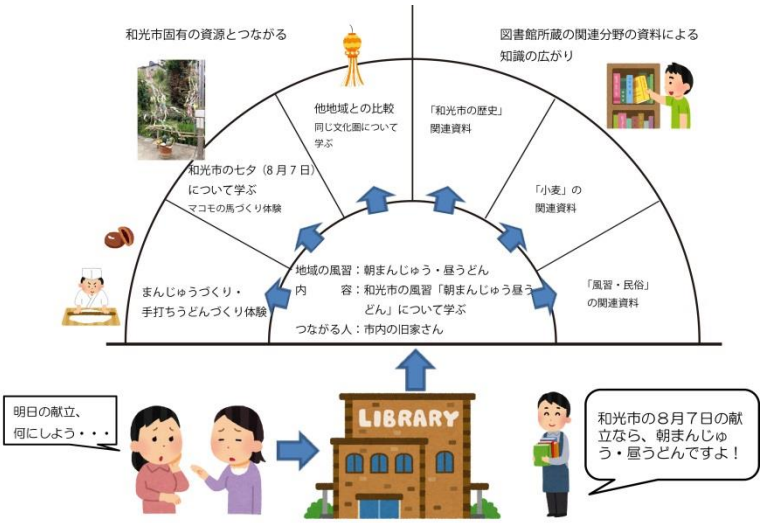
多様な本を有する図書館は、その分だけつながるきっかけを持っているということができる。図書館は、市民が魅力的な地域内人財を知るきっかけとなる場を用意することができるのである。

【企画②】地域の魅力を知るきっかけづくり

地域の魅力ある資源を知っていただくためには、市民のニーズを踏まえながら、そのニーズに関連する地域の魅力を提示していくことが効果的であると思われる。以下、そのニーズを踏まえながら地域の魅力をつなげていく企画案を提示したい。

和光市域は七夕（和光市では 8 月 7 日とされる）やお盆の際の食事において「朝まんじゅう、昼うどん」と呼ばれるように、旧家では今もなお朝食にまんじゅう、昼食にうどん

を食べる風習がある（註12)。こうした地域の個性ともいうべき伝統は、時代の移り変わりとともに失われつつある一方で、例えば無作為抽出で行われた「和光市食育推進計画づくりに関するアンケート調査」によれば、「今後取り組みたいこと」という項目で「季節感のある食事や行事食・郷土料理を取り入れる」と回答した人は 51.6%に及んでいる（和光市 2009「和光市食育推進計画作りに関するアンケート単純集計集計結果」)。いわゆる土用丑の日のウナギや大晦日の年越しそばのように、8 月 7 日は和光市域では七夕にあたり、その日の献立は「朝まんじゅう、昼うどん」というメニューが伝統的であるということを提示することで、地域の魅力を知る一つのきっかけとなるだろう。このような伝統的風習に興味を持った人が、さらに理解をふかめることができるように、図書館において根拠資料や関連資料と共に旧家の方のお話を聞く機会や、実際にまんじゅうやうどんを手作りする体験プログラムを提示して知るきっかけをつくる。これによって、ニーズを出発点に、市域の風習や旧家とつながるきっかけの場とすることが可能であろう。



図書館が核となり、さらなる広がりを生む

このように、市民が持っている色々な希望を理解し、それを和光市の地域資源を知っていただくための良い機会と捉えて情報提供することは、様々な場面に応用することができる。例えば認知症に関心が深い人のために、図書館でその理解を深めるための情報提供を行うとともに、和光市に所在する認知症専門病院の「和光病院」の取組みを病院関係者に語っていただいたり、実際に現地を見学させていただく機会を用意すれば、自身の関心と和光市が持つ地域資源としての病院がつながるきっかけの場とすることができるだろう。家庭菜園をはじめようとしている人をターゲットに、家庭菜園や植物の育て方の本等を集めたテーマ展示を開催して関連資料の情報を集約するとともに、市内農業（農家）さん等に直接経験からの指導をいただいたり、その実際の商店や農地を訪問して各々の取組みを学ぶことで、自身の知りたい情報を得つつ、自然に「市内にはこんなところがあったのか」と知るきっかけとすることもできる。また、最も地域について関心が低いと思われる「仕事の都合で転入してきた単身世帯の若者（註 13)」を対象としても可能である。例えば内閣府が実施した「若者・女性の活躍推進に関するアンケート調査」によれば、「あなた自身、あるいは、あなたのご家族（配偶者あるいは子ども）に、自らのキャリアアップのために、学び直しを行ってみたいと思っている方はいますか。」という設問に対し、20 代の実に 56.3%の人が「いる」と回答し、中でもその分野については「国際ビジネス関係」と「法律、経済、会計・簿記」が 25.0%と同一で最多となっている（註 14)。法律の学び直しであれば

和光市に立地する司法研修所、会計・簿記への興味は同じく和光市に立地する税務大学校に協力いただき、その道のプロフェッショナルに「法律を学ぶとはどういうことか」「学ぶポイントとは」という生の声を聴く場をつくる。自身の学び直したいという気持ちを実行するきっかけをつくるとともに、図書館では学ぶための資料を用意して学び直しをサポートする。簡単な仕掛けではあるが、結果的に自身のキャリアアップを実行するきっかけとなるとともに、和光市にはプロフェッショナルを養成する機関があったことを知ることにもつながる。

市民が「知りたい」と思っていることを把握し、それを「市内の様々な地域資源（魅力）」と関連付けることで、人と地域の間につながりが生まれる。このつなぎ役としての役割を担うのが図書館、つまりは司書である。平成 17 年に「図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会」がまとめた報告書『地域の情報ハブとしての図書館（課題解決型の図書館を目指して）』には「課題解決型の図書館」という言葉が明記され、公共図書館、中でも司書がその中心的役割を果たすことが期待されている（図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会 2005）。市民が求めていることを理解し、それと地域資源を関連付けてそこに目を向けるきっかけをつくるためには、図書館は「市民が求めていること」と「地域資源」の双方に対して常にアンテナを張っている必要があるだろう。そのためには、司書には重要な役割を担ってもらわなければならない。図書館は専門的職員である司書が配置されていると同時に様々な資料を有している稀有な機関である。その図書館が保有する価値を最大限に活用することで、これまで気づかなかった魅力に気が付き、地域とつながるきっかけが生まれるのではないだろうか。

第４章　地域への思いをカタチにできる図書館へ

最後に、市民が持つ「地域への思い」をカタチにすることができる図書館となることを提言したい。

行政が市民と協働して地域課題にあたるようになってからすでに年月が経ちつつある。多くの自治体では市民協働を重視し、NPO や市民団体と手を組んで様々な取組みを行っていることだろう。しかし、市民との協働において「NPO だからまかせる」とか「市民と協働しなければならないから」といったことを義務的に重視することは意味をなさない（中岡 2012）。市民が持つ様々な知恵や能力、そしてその「地域への思い」と協働していくことが何よりも重要である。「三人そろえば文殊の知恵」という諺があるように、人々がつながることによって一人では到底考えられないアイディアが生まれる可能性は高い。

では、和光市図書館では市民の地域への思いをどのように活かせばよいのだろうか。ここまでの企画は図書館が主体となってサービスを提供するものであった。ここでは市民が主体的に参加することで効果を発揮する企画提案を行いたい。

【企画③】ウィキペディア・タウンの手法を用いた思いを共有するきっかけづくり

近年、各地で「ウィキペディア・タウン」という手法が注目されている。ウィキペディア・タウンとは、その地域にある文化財や観光名所等の情報をインターネット上の百科事典「ウィキペディア」に掲載し、さらに掲載記事へのアクセスの容易さを実現した街（町）

のことである（註 15）。この手法を図書館で市民参加型プロジェクトとして行うことを提案したい（別紙 A）。この企画は、簡単に言えば参加者が実際に本で調べたり、現地に赴いて調査し、それをみんなでウィキペディアの記事にするというものである。

なぜ図書館で、かつ市民参加で行う必要があるのか。それは図書館が持つ多様な情報を活用することができる点と、図書館があまり有していない市民の生の声を活かすことができるという点。そして参加者においては地域を体験的に知ることができ、過程を通じて地域の魅力や参加者同士でつながることができると見込まれるからである。この企画を単にウィキペディアの記事をつくることを目的に図書館職員が単独で行ったところでその意味は薄い。かつて和光市で行われた「和こたん」のように、市民が自らの目線で魅力を探し出し、色々と気づいたことや、他の人に知ってもらいたいという思いがカタチにできるような場に図書館がなることが重要なのである。

誰でも閲覧できる記事を作成するということは、「誰かに地域の魅力を伝える」ということである。つまり、その魅力への個人の思いを、今後情報の受け手となる人につなぐことになる。人と人、人と地域、そして地域への思いをカタチにし、共有するきっかけとして効果的な企画であると考える。

【企画④】地域への思いが活かせる場へ

これまで提案してきたことは、あくまで筆者個人の少ない知識と経験の範囲から生み出したものに過ぎない。個人の考えには当然限界が存在する。しかし、和光市には 8 万人に及ぶたくさんの市民が存在している。多くの人が、それぞれの知識や経験を活かした企画を行えば、筆者の提案など問題にならないような様々な事業が思いつかれることであろう。

例えば既存の「和光市図書館サポーター」は、近年ではオリジナル企画を様々に提案し、実施している。直近ではサポーター企画として「大和音頭を探せ」といった企画を打ち立て、平成 28 年 12 月 4 日に和光市図書館を会場に実施した。この企画は、和光市ゆかりの童謡詩人清水かつらが制作に関わっているとされる「大和音頭」が実は 2 種類存在するらしいということに興味を持ったサポーターが、その調査の現状を報告するとともに、参加者から知られざる情報をつのるというものであった。企画に連動して、和光市図書館下新倉分館では関連資料を展示する等、サポーターと図書館の連携よる新たな形が創られつつある。サポーター自身が資料に関する研究を重ね、それを一般公開するまでに至ったというのは一つのモデルケースになり得るだろう。

埼玉県の「NPO・ボランティアとの協働事業調査（平成 27 年度）」によれば、埼玉県下 63 市町村のうち、和光市の協働事例数は第 4 番目と上位に数えられている（註 16）。これは和光市には「地域を良くしよう」という思いがあふれているためと見ることができる。筆者が和光市図書館及び和光市図書館下新倉分館の協力を得て実施したアンケート調査によれば、現時点でボランティア活動を地域で行っている人は 20.6%程度であり、活動をしていない人は 76.5%にのぼるものの、「あなたは『自分や自分の家族以外の人のために、図書館で好きな活動をしてみてください』と言われたら何かやってみたいですか」という設問については、58.8%が「どちらかといえばやってみたい」と答えている（別紙 B）。このように、図書館を舞台にして活動したいという「思い」は確実に地域の中に存在してい

る。

重要なことは、「誰かのために」という思いを「誰か」につないでいくため、その地域への思いを活かすことができる場を用意することである。地域の中には「誰かのために」という思いを持った様々な「人財」が存在する。実際に和光市図書館には「図書館サポーター」だけではなく、様々なボランティア団体の方々が既に長い年月にわたり図書館を舞台に誰かのために活動している。もちろんまだ見ぬ思いを持った方も大勢いることだろう。こうした思いを持った人々が、自らのアイディアを実現できる環境を整えることが必要であり、多様な資料と多様な人の集まる図書館は、まさにその場としてふさわしいと筆者は考える。

市民が持つ地域への思いを活かし、その思いを共有していく場になることは、図書館にとっても活動する市民にとっても、そしてサービスの受け手である利用者にとっても win-win-win な展開となると確信する。こうした思いをもった方々が、その思いを実現することができるように、和光市図書館はあるときは積極的に支援し、あるときはできるかぎり自由に活動ができるようにしながら「地域コミュニティを支える情報拠点」としての役割を果たす必要がある。

終章　まとめとして

以上、和光市の現状に対し、和光市図書館が持つ可能性と目指すべき方向性について。これまで見てきたように、図書館は「人」「地域」「地域への思い」をつなぐため、そのきっかけを提供する場としての可能性があふれている。和光市の図書館を舞台に生まれたつながりが、さらに新たなつながりを生み出していくという本稿を作成する中で熟考してきたこの理想の姿は、もう筆者の頭から離れることは無いだろう。この理想を追い求めるための挑戦は、既に筆者の中で動き始めている。この筆者の「思い」がつながりを生み、それが広がっていくことを切に願い、本稿の結びとしたい。

【引用・参考文献】

猪谷千香(2014)『つながると図書館　コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房

糸賀雅児(2016)「まちづくりを支える図書館」『月刊ガバナンス』8 月号　ぎょうせい

岡本真監修・青柳英治編著(2016)『ささえあう図書館 「社会装置」としての新たなモデルと役割』勉誠出版

中岡貴裕(2012)「地域博物館と「公共」を担う人々について　～市民・NPO との関係を中心に～」『MUSEUM　STUDY』24　明治大学学芸員養成課程

日本図書館協会(2002)『市民の図書館　増補版』※増補版第 1 刷は 1976 年

沼尾波子(2015)「社会経済構造の変容と地域づくりの課題～安心・安全な暮らしの構造に向けて」(大森彌ほか『人口減少時代の地域づくり読本』公職研に所収)

広井良典(2009)『コミュニティを問いなおす－つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房

柳与志夫(2016)「公共図書館の役割と可能性」『月刊ガバナンス』8 月号　ぎょうせい

山崎亮(2102)『コミュニティデザインの時代』中公新書

＜報告書類＞

28 期沼尾ゼミ　和光市　中岡　貴裕

埼玉県『埼玉県統計年鑑』(昭和 29 年第 1 回発行から平成 26 年度まで)

図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会 2005『地域の情報ハブとしての図書館（課題解決型の図書館を目指して)』

内閣府(2013)『若者・女性の活躍推進に関するアンケート調査』

内閣府(2014)『平成 25 年度家族と地域における子育てに関する意識調査報告書』

内閣府(2016)『平成 27 年度社会意識に関する世論調査』

和光市(1971)『和光市の統計』

和光市『統計わこう』※1974～2016 年

和光市(2009)『和光市食育推進計画作りに関するアンケート調査　単純集計　集計結果』

和光市(2014)『和光市都市計画マスタープラン改訂版』

和光市(2016)『平成 27～31 年度　和光市まち・ひと・しごと創生総合戦略　～快適環境 No.1 の都市へ～』

和光市教育委員会(2016)『和光の教育』

和光市自治会連合会創立 50 周年記念誌委員会(2013)『自治会連合会創立五十周年記念誌』和光市自治会連合会

【註】

1. 『統計わこう平成 27 年度版』による。
2. 2013 年発行の『自治会連合会創立五十周年記念誌』に掲載されている昭和 37 年の町内自治会と加入世帯数の記録と、1971 年発行の『和光市の統計』に掲載されている昭和 37 年の世帯数から筆者が算出した加入率である。なお、それぞれの基準月が 12 月と 4 月であるため、確たる数ではないことをお断りしておく。
3. 平成 22 年国勢調査によれば和光市の昼間人口は 68,447 人、夜間人口は 80,745 人であり、昼夜間人口比率は 84.8%となっている。なお、同調査によれば、和光市民の内市内で通勤・通学している人は 35.8%にとどまり、残りの人は他市町村に通勤・通学していることがわかる。
4. 筆者ヒアリングによる。
5. 「和こたん」は「和光市を元気に盛り上げる、和光市のいい所(人、地域、店)を知って和光市を大好きになってもらい、コミュニティや人間関係を尊重し、市民が和光市を自慢できる「ふるさと」と認識してもらい、和光市をベッドタウンからホームタウンへと変化させ、地域を元気にするイベント企画」とされている。(和光市ホームページより抜粋。)
6. 平成 22 年度「生涯学習施策に関する調査研究」社会教育施設の利用者アンケート等による効果的社会教育施設形成に関する調査研究　平成 23 年 3 月（文部科学省委託　発行元：株式会社三菱総合研究所）
7. 定期的に更新される機会はあるものの、転出者等が則反映されるわけでもないため、この数字はあくまでも参考数である。
8. 和光市図書館システムの情報による。
9. 対象は市内にお住まいで、分娩予定日が平成 25 年 7 月 16 日から 11 月 30 日であり、かつ、妊婦健診の２回目を受診済みの出産を控えた方。
10. 筆者ヒアリングによる。
11. 図書館法第三条　　図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望に沿い、更に学校教育を援助し、及び家庭教育の向上に資することとなるように留意し、おおむね次に掲げる事項の実施に努めなければならない。

    一　　郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード及びフィルムの収集にも十分留意して、図書、記録、視聴覚教育の資料その他必要な資料（電磁的記録（電子的方式、磁気的方式その他人の知覚によつては認識することができない方式で作られた記録をいう。）を含む。以下「図書館資料」という。）を収集し、一般公衆の利用に供すること。
12. 冨岡進 2015「新倉地域の伝統行事 - 冨岡家を中心として - ※講演録」『和光市デジタルミュージアム紀要』第 1 号　和光市教育委員会
13. 平成 27 年度市民意識調査において、居住地域への関心度を年代別にみると、「あまり関心がない」「関心がない」の回答率は特に 10・20 代で多く 23.4%となっている。
14. 内閣府 2013「若者・女性の活躍推進に関するアンケート調査」による。
15. ここではあえて「ウィキペディア」の記事を引用した。なお、平成 28 年 12 月現在の記事である。
16. 平成 27 年度埼玉県「NPO・ボランティアとの協働事業等調査」による。

＜謝辞＞

末筆となりましたが、地域リーダー養成塾において主任講師として親身に、そして熱く

28 期沼尾ゼミ　和光市　中岡　貴裕

ご指導いただいた沼尾波子先生、共に学んだ沼尾ゼミ生各位、沼尾ゼミの事務局を担っていただいた安樂良太氏、そして地域活性化センターの皆様に心より感謝申し上げます。また、お忙しい中にもかかわらずヒアリングに応じていただいた横田明菜氏、山勢哲久氏、久保田早苗氏、視察先で様々なヒントをくださった伊万里市民図書館、武雄市図書館、詩楽の森図書館の各位、さらにお名前をお出しできなかった多くの方々に厚く御礼申し上げます。そして快く地域リーダー養成塾に送り出していただいた茂呂あかね館長・小林理恵主査をはじめ、和光市の同僚の皆様と家族の支えがなければここまでには至りませんでした。文末とはなりましたがここに改めて感謝申し上げます。